金龍山金龍姫と名のる子神が、大国光道の所に初めてやって来たのは、一九八六年（昭和六十一年）一月二十六日のことであった。そのころ光道は白山神行に取り組んでいたが、最初の一年で白山二十九か所の内の三分の二ほどをやり終えて、残りの山々にアタックするための資金作りをしている真最中であった。

白山神行初年度の中間報告をするために加賀の白山に登詣したおり、光道はシラヤマヒメから著述に取りかかるようにとうながされていて、そのための心の準備をしているころでもあった。著述に関しては、その年の正月元旦に富士の大神と話を交わしたおりにも、書きはじめるべきであるという指示を受けていた。しかし、人間というものは資金がなくては何もできないので、神行のためにも書くためにも必要な資金をかせぐために、光道は毎日毎日きつい仕事に精を出していたのであった。ホンダにおける半年間の期間工のアルバイトであった。

このころ白山里子の中には、夜叉ヶ池の龍神である十才の夜叉姫が入っていたが、その態度があまりに傲慢で人間を馬鹿にしたものであったことから、光道はいらだつことが多く、しかったりいじめたりする日々が続いていた。ある日、彼を従者扱いするような振舞いがやまないので、とうとう堪忍袋の緒が切れた光道が、「お前なんか邪魔になるだけだから、もう夜叉ヶ池へ帰れ！」と激しくしかりつけたことがあった。それに対して「もう来ないから」という捨てゼリフを吐

いて、夜叉姫が里子から出て行ったあと、腹立ちのやまない光道が食事を終えてコタツに入っていると、おずおずと低姿勢で里子にかかってきた者があった。
「今度は誰？」と光道は、わずらわしさにうんざりしながら聞いた。
「さあ、わかりません」
「なぜわからない」
「白山里子が未だそこまで到達していないので、わかりようがありませぬ」
「神さま？」
「そうです」
「里子の神さま？」
「そうかもしれません」
「ああ、これは大変だ」と光道は言った。里子の親神は母神シラヤマヒメであり、夜叉姫はその系統の龍神だったからである。「俺のやったことは間違ったことだったのかなあ」
「一度は言われると思っておりました。思い上がっておりましたから。ピー助パー子というものは、所詮そのようなものでございます」
「俺は秩序を求めているんだ」
「これが秩序でございます」と言って、シラヤマヒメはかしずくような振舞いを

した。そして、自分のほうが一段階格が低いと言うのだった。
　人間とはいえ、そのミタマをみがきあげた者は、その光の度合いによっては、神々よりも格は高くなる。龍神の分際で、こちらが相手を尊重して優しく扱い、馬鹿を演じてやれば思い上がって姫さま気取り。女中ふぜいが主人に意見をする始末。神と名のつく者のあまりの愚かしさに、不快感がつのっての一場面であった。
　夜になると、また誰かが里子に入っているのが感じられた。光道が風呂に入っていると、不快な思いがつのり、憂鬱な気分になってきた。また夜叉姫がやって来て、手前勝手なことをやりはじめたと感じた光道は、「お前たちには、耐えに耐えている俺の心はわかるまい」と里子の中の者に言った。すると何だかブツクサ言いだした。要するに人間の身をまとっているとその制約は大きくて、霊界のお化けや動物までもが馬鹿にしてくるのである。霊界次元では格の高い龍神にしてみれば、普段人間から崇拝されたりもする存在であるため、人間とみれば軽くみてくるわけである。しかし本来の姿から言えば、人間のほうが龍神よりも格は高いわけで、ミタマの開いた人間には、その秩序の狂いが耐えがたくなってくることになる。
「おぬし見抜いたな」

「お前は誰だ？」と問いつめても答えようとしないので、
「帰ったんじゃないのか？」と光道は言い方を変えた。
「帰らなかった」
「誰に言われて来たんだ？」
「シ、ラ、ヤ、マ、ヒ、メ」と夜叉姫はしぶしぶ言い、「わからなかったから」と付け加えた。
「お前が馬鹿にしている観音さんは、ちゃんと心得ていたぞ。『本来なら畏れ多くて口もきかれない』と言っていた」
「へェー」と夜叉姫はおそれいったような声を出した。
「わからなかったから」
「山の中のちっぽけな池の主では、世の中のことはあまりわからないんだろう」
「大王星の神は意地が悪いんだね」
　このことがあってから、夜叉姫は自分に言い聞かせるように、「これが私の行だから。私は女中だから。これが私の行だから」などと言いながら、台所仕事や布団の上げ下ろしをするようになった。夜叉ヶ池では五名のお付きがいる夜叉姫にしてみれば、たとえ光道相手ではあっても、そうした下働きは耐えがたかったのであろう。

しかしそれでも夜叉姫の態度はさほど変わらず、光道にとってはわずらわしく、いらだたしいことのほうが多かった。そのため光道は「若いほうがいい」と言い出すようになった。姫神神社と夏織（かおり）の夢を見て、白山神行の残りの山が姫神山にかかわりがあるという暗示を受けたことから、娘白山であるカシキヒメ夏織のことが思われて、母神系統の夜叉姫より彼女が来てくれるほうがいい、と光道は言ったのだった。すると夜叉姫は怒り狂って彼を責めた。「殺してやる！」と言うのである。神という存在は、どうしてこれほど安易に「死ね」だの、「殺す」だのと、ヤクザみたいなことを言うのだろう、と光道はうんざりして思うのだった。

「殺したければ殺すがいい。こんな人生に何の未練もないんだから。さあ、早く殺せ」

次の日、夜叉姫は里子の中で一日中泣いていたという。光道に「帰れ、帰れ」としつこく言われ、混迷の度を加えている光道の修行の邪魔になってはいけないということで、代わりが見つからないままに、夜叉ヶ池に帰らなくてはならないことになったからだった。

別れに際して、光道が何かおみやげをやろうと言うと、夜叉姫は彼の心の十分の一がほしいと答えた。何のことだかわからないので、「神さまに聞いて、いい

と言われたら持っていくがいい」と光道は言ったが、要するに夜叉姫のことを、いつまでも考えていてほしいということらしかった。魚（うお）の好きな夜叉姫は、うなぎのカバ焼きを光道の分と二人分食べ、彼が眠っている間に帰って行った。夜叉姫に対する光道の態度はそっけなかったにちがいないが、白山神行完成を目前にして、彼女の存在が彼にとってマイナスにしか働かないということであれば、どうしようもないことであった。

しかし夜叉姫を追い返したことは、妨害者の封じ込めを受けて自由を失っていた、光道自身の感覚を取りもどすことにつながった。正月休みに富士浅間神社に参拝し、伊豆から大島を巡って帰ってきてからというもの、光道は父神の支配を受けて自分を見失っており、その苦しみを夜叉姫にぶつけ、神々に悪態をつくことでまぎらわしていたのであった。その封じ込めが解けて自分の感覚がもどってきたとき、彼の前にあったのは、「日本神道の将来」をテーマにした著述の仕事であった。

この課題は前年の白山参詣のときから出されており、これを書くために百か日の山ごもりをするようにという要請が、再三シラヤマヒメのほうから出されていた。また正月に富士の大神と話したときにも、同様の指示が出されていたが、光道は外から何やかやと指図されるのがいやで、まともに受け取らずにきていた。

それというのも、神レベルから見た問題と、人間にとっての課題の在り方との間に、簡単に処理できない違和感があったからである。肉の身をまとってその身を維持していかなくてはならない人間にとっては、そのことを度外視して自分たちの都合だけを押しつけてくる神々のやり口が、我慢のできない身勝手なものに映るのである。人間の生を生きていくだけで身をすり減らさなくてはならない人間。世間的な人間社会での欲を捨てて神への道に入れば、そのために生活に不自由することになり、その難題と戦いながら神ごとを進めなければならない人間にしてみれば、神レベルから一方的に課題を出してくるやり方は、人間の立場を無視した身勝手なものとしか思えなかった。

人を避けて冬場の山に入れという難題。そのことが神への直接的な道かと言えば必ずしもそうではなく、著述を進めるための手段として、そうした人里離れた深山に入る必要があるのだという。神であれば、冬山に入ることは何の苦もないことではあろうが、人間にしてみれば、それだけのことを可能にするためには、様々な問題を解決しなければならなくなる。食料の問題、装備の問題、それを可能にするための経済的な問題、そして光道がいない間の里子の問題。一冬山にこもってきますと簡単に言えない問題が、人間にはかぶさってくるのである。

それに光道は、山へ逃げ込まなければ著述ができないとは、思いたくなかっ

た。いかなる妨害が入ろうとも、人間が人間として人間社会で生きていくかぎり、その課題も人間社会の場でなされてこそ、意味があると思われたからである。光道に自分の親神の山がなく、その身一つが星との接点であるとするならば、彼のいる所がすなわち山であり、その身が山であると思われた。直接彼につながる神がいるわけでもない山に入ってみたところで、彼自身を掘り起こすことなどできはしない。あくまでも自分の立場で、自分独自の方法で、自分自身の道を進めていかなくてはならない。光道はそんなふうに考えていたのであった。

そうして光道が長年の念願であった著述の道を、なんとかして切り開こうと、その可能性を模索していたころのことであった。それは昭和六十一年一月二十六日のことで、夜叉姫がいなくなってから十日ほどが過ぎた日曜日のことであった。今まで来たことのない子神が里子にかかった。

「お名前は何と言うの？」

「金龍山金龍姫」

「どこから来たの？」

「浅草」

「観音さんのところ？」

「そう」

金龍姫の話によれば、浅草は昔は海であり、浅草寺は龍宮系の白山神社であったが、アマテラスに支配されてから観音と名を変えたのだという。浅草寺の本尊は十一面観音で、母神シラヤマヒメの仏界における変化（へんげ）、そして龍宮界でいえば、ワカヒメギミが祭神である。そして金龍山と呼ばれているように、この寺には、ワカヒメギミの娘に当たる金龍姫という姫神もいるのである。金龍姫とは、神界では娘白山の菊理姫に当たるが、光道の所に来たのは龍神のほうであった。彼が母神より若い娘のほうがいいなどと公言したからであったろう。しかしこのことに関しては、「若いほうとくっついたりしたら殺してやる」と、里子の親神は怒りを現わしてもいたのであった。

金龍姫は観音さんのことを「お母さん」と呼ばずに「おばあさん」と呼んだ。金龍姫は人間の年令で言えば十才なのだという。

「どうして十才ばかりがやって来るの？」と光道は不思議に思って聞いてみた。夏織が十才、夜叉姫も十才だったからである。

「光ちゃんは若いほうが好きなんでしょう？」

「若いほうと言ったって十才の子供のことじゃないよ」

「光ちゃんは里ちゃんが嫌いなの？」

「里ちゃんとはイヤダイヤダで始まって、ここまで来ているんだよ。今さら嫌い

だなんて言えるわけないじゃないか。別れたくても里ちゃんの相手はズッコケてしまって、役目をやる気がないじゃないか」
「里ちゃんのことはほんとに好きじゃないの？」
「そんなこと聞かなきゃわからないのかい？　神さまだったら人間の心ぐらいわかるだろう」
「わかる。いつくしんでいる」
「ならそれでいいじゃないか。今回のドラマは『天地開闢』のシナリオ通りというわけにはいかない」
「今なら『天地開闢』は書けるの？」
「書けるよ。だけど今回は一幕だけで終わりだな。それ以降は日本神道の枠をはずれてしまう。日本神道の枠の中でやろうとすれば、俺はスサノヲを演じなければならない。俺が二役演じるわけにはいかない」
「やれば？」
「俺は父神系統なのかね？　違うだろ？」
「父神系統でなくて子神系統だわね」
「だから、母神を立てるところまでで今回は終わり。それ以降は、日本神道の枠の中ではできないことになる。日本神道を越えてしまうんだ。日本神道で、父神

が立つのは二千年後だと日老は言っている。ほんとか嘘か俺は知らないけど、日本神道の枠の中でやろうとすれば、そういうことになる」

白山神行を続けているこの当時の光道には、まだ自分の役目の全貌が見えてはいなかった。ただ彼は、自分の役目をさっさとすまして根元に行けさえすれば、天地開闢の神界劇などどうでもよかったのである。

こうして金龍姫は、光道と里子の生活の中になんとなく入り込んできて、そのまま居座ってしまったのだった。光道にしてみても若いほうがいいと言った手前、簡単に追っ払うわけにもいかなかった。しかし、どうして子神ばかりがやって来て、まともな神の指導が受けられないのか、彼には不思議だったし、不満でもあった。そうかといって成神が出れば出たで、彼は悪態をついたり反抗したり、批判するようなことばかりしていたのであった。神の立場にしてみれば、子供を送り込む以外に方法がなかったのかもしれなかった。

後略